

イエス・キリストの十字架と復活、これは私たちの救いの根拠となることです。そして主イエスは復活して40日の後、500人以上の人々に復活したご自分を見せられて天に帰られました。復活の証人がそんなにも大勢いると共に彼らはキリストの昇天の証人でもあります。やがて天におられる主イエスはもう一度、私たちのところに来られて、最後の審判、最後を迎えます。主イエスのご降誕をはじめ、これらのことは神のご計画のうちの一連のこととして進んでいます。そして私たちもまたこの主のご計画、主のみこころのうちに進んでいます。ですからみなさんご存知かと思いますが History (歴史) は His Story (キリストの物語) とも言われるわけです。その流れの中で今日は復活のキリストが昇天 (天に帰られた) ことについて聖書から考えたいと思います。この主イエスの昇天には大きく二つの意義があります。ひとつは、主イエスが、この世に「御国をもたらすため」に天に帰られたこと、もうひとつは、私たちが「御国に迎えるため」に天に帰られたということです。

1. 私たちに御国をもたらすため

まず、「御国をもたらすため」ということですが、主イエスの福音は「神の国」の福音でした。イエスが宣教を始められた時の第一声は「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから」(マタイ 4:17) でした。その後も、イエスは「御国の福音を宣べ伝えた」と、聖書は書いています。山上の説教でも、イエスは「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人たちのものだから」(マタイ 5:3) と語り、「御国が来ますように」(マタイ 6:10) と祈るよう教えられました。「神の国は、どのようなものと言えよでしょう。何にたとえたらよいでしょう」(マルコ 4:30) と言って、イエスはたとえを語り出されましたが、その「たとえ」の多くは、神の国に関するものでした。

イエスが語られた神の国は、イエスが私たちのたましいの主となり、その人生を導いてくださること、また、やがて目に見える形でこの世界を治められることを指していたのですが、ユダヤの人々は、神の国を、当時ローマ帝国の属国になっていたユダヤの国が独立を勝ち取ることでありと考えていました。そして、イエスにその独立運動のリーダーとなることを期待したのですが、イエスはそれとは全く逆のことを教えられました。そして、イエスはローマへの反逆者として処刑され、人々の望みは消えてしまいました。そのときの失望は、エルサレムからエマオの村に向かって歩いていたクレオパのことばに表れています。そのとき、クレオパは復活されたイエスが彼と共におられたのに、それがイエスだと気づかないで、イエスについてこう言いました。「この方は、神とすべての民の前で、行ないにもことばにも力のある預言者でした。それなのに、私たちの祭司長や指導者たちは、この方を引き渡して、死刑に定め、十字架につけたのです。しかし私たちは、この方こそイスラエルを贖ってくださるはずだ、と望みをかけていました。」ルカ 24:19-21 クレオパはこう言って、深くため息をついたかもしれません。イエスが世から去られたとき、神の国も消え去ったと人々は考えたのです。

しかし、事実はそうではありませんでした。イエスはよみがえられました。十二弟子ばかりでなく、五百人以上の人々に、ご自分が生きておられることを、四十日にわたって、お示しになりました。使徒 1:3 に「イエスは苦しみを受けた後、四十日の間、彼らに現われて、神の国のことを語り、数多くの確かな証拠をもって、ご自分が生きていることを使徒たちに示された」とある通りです。ここに、イエスは復活のちも、弟子たちに神の国について教えたとあります。イエスの宣教とともに始まった神の国は、イエスの死によって終わったのではないのです。神の国は、イエスの復活によってよりいっそう確かなものとなったのです。

けれども、弟子たちの中には、まだ神の国とユダヤ民族の独立とを結びつけている人たちがいました。それで、彼らは「主よ。今こそ、イスラエルのために国を再興してくださるのですか」(6節)と尋ねました。イエスの最初の弟子はみなユダヤの人々でしたから、自分たちの民族の将来に関心があるのは当然でしょうが、イエスは、それに対して「いつとか、どんなときとかいうことは、あなたがたは知らなくてもよいのです。それは、父がご自分の権威をもってお定めになっています」とだけしかお答えになりませんでした。そして、「しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。」(使徒1:8)と言われました。このことばは、神の国は、ユダヤの人々のだけのもの、イスラエルの国境やローマ帝国の中に閉じ込められているものではないことを教えています。神の国は、長い間のユダヤの人々の希望でしたが、今は、全世界の人々のものとなったのです。神の国の福音はエルサレムから始まって、地の果てにまで宣べ伝えられるもの、福音が宣べ伝えられるところどこにでも広がっていくものなのです。神の国は、御国の王であるイエスが天から人となっておいでになった時、この世にお生まれになることにもたらされたのですが、イエスが天に帰られることによって消えてなくなったかというところではなくイエスが天に昇られることによって、神の国はもっと大きく広がったのです。イエスは神の国を広げるために天に昇られたのです。

私たちは、大勢の人に話そうとするときは、人よりも高いところに立ちます。高ければ高いほど大勢の人に届きます。御国はもっとも高い位置と考えられるでしょう。イエスはそこから、弟子たちに聖霊を注ぎ、聖霊によって教会が生まれました。教会はまたたく間に世界中に福音を行き渡らせました。教会は「イエス・キリストは、すべての人の救い主、王であり、主である」とあかしし、神の国を宣べ伝えてきました。世界中の半数以上の人々が、神の国の福音を聞き、イエス・キリストを信じて、神の国の国民とされました。二千年前から今に至るまで、キリストは教会を通して、全世界に、全人類に、福音を語り続けておられます。キリストは今も、私たちに御国の福音を語り、私たちに御国に招いておられます。イエスが宣教を始められたとき語られた「時が満ち、神の国は近くなった。悔い改めて福音を信じなさい」(マルコ1:15)とのことばは今も真実です。時はもっと満ち、神の国はもっと近くなりました。イエスがもたらしてくださった神の国を、皆さんは、悔い改め、信じ、受け入れておられるでしょうか。

2. 私たちを御国に迎えるため

イエスが天に帰られた第一の目的は、私たちに御国をもたらすためでしたが、第二は、私たちに御国に迎えるためです。

神の国は二千年前から今にいたるまで、どんどん広がり、大きくなっています。そして、いつの時か、神の国は完成の日を迎えます。そのとき、イエスは、ふたたび天からおいでになって、私たちに完成された神の国に迎えてくださるのです。9節からもういちど読んでみましょう。

こう言ってから、イエスは彼らが見ている間に上げられ、雲に包まれて、見えなくなられた。イエスが上って行かれるとき、弟子たちは天を見つめていた。すると、見よ、白い衣を着た人がふたり、彼らのそばに立っていた。そして、こう言った。「ガリラヤの人たち。なぜ天を見上げて立っているのですか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行かれるのをあなたがたが見たときと同じ有様で、またおいでになります。」

「またおいでになる。」これを「再臨」と言いますが、それはなんと素晴らしい希望でしょう。イエス

が再びおいでになるとき、キリストにあつて眠った人たちは、イエス・キリストが復活されたように、栄光のからだを与えられて復活します。生きていてイエスの再臨に出会う人たちは死を見ずに栄光のからだに変えられます。そして、両者ともに、イエスが昇天されたように、天に上げられ、御国に迎えられ、いつまでも主と共にいるようになるのです。イエスが天に帰られたのは、天に私たちのための場所を備え、私たちを天に迎えるためです。イエスはヨハネ 14:1-3 でこう言っておられます。

あなたがたは心を騒がしてはなりません。神を信じ、またわたしを信じなさい。わたしの父の家には、住まいがたくさんあります。もしなかったら、あなたがたに言うておいたでしょう。あなたがたのために、わたしは場所を備えに行くのです。わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとの迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。

「わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです」と主は言われました。主がおられるところ、それは天です。主は、私たちを天に迎えるため、天に昇られたのです。私が世を去るときも、私のたましいを迎えてくださる方が、天におられる、これは、ほんとうに大きな慰めです。

イエスは、言われました。

わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。(ヨハネ 14:6) 主イエスはご自分こそいのちに至る道であるとおっしゃいます。イエスを自分の救い主とし、主と信じる者は、イエスによって、イエスのおられるところに迎えられます。

私たちは例外なく死を迎えます。例えると「死」は、ドアのようなものです。死によって私たちは無くなってしまふのでなく、ひとつの部屋から別の部屋に移るだけです。しかも、そこには主がおられるのです。おられるだけでなく、暖かく私を迎えてくださるのです。

40年ほど前のことですが留学中の夏休みに知人の実家を夫婦で訪問したことがあります。ちょっと予測が甘くて夕方には着く予定が結局、夜中12時近くになってしまいました。その家はポツンと一軒家のごとく山の中にありまして、今のようにナビもなければ携帯もありません。地図を頼りに行くのですがそれも暗やみで道路の地名や標識がよく分かりません。あちらに連絡も出来なければ自分がどこにいるかも分からなくなってパニック寸前という状態になりました。そんな中、ようやく明かりのついた家を見つけ、そこが知人の実家ということが分かり、中から知人のお父さん、お母さんが出てきて暖かく私たちを迎えてくださいました。その家の中がどうなっていたのかは完全に忘れていますがご両親が待っていて下さり、迎えてくださったことは今でも鮮明に覚えています。天の御国で私たちを迎えるために主イエスは天に昇られたのです。

イエス・キリストは三日目によみがえり、四十日して天に帰られた。このことは、私たちの人生に無関係なことではありません。この事実が、私たちを生かすのです。私たちを死への恐れや不安、また思い煩いから救い、私たちに、御国を目指して生きるという、人生の目的を与えるのです。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。」天への道となつてくださったイエス・キリストにあつて、この世を歩み続け、ついに御国にたどりつくお互いでありたく思います。